

『ベルリン物語集』作品論

酒 井 府

(I)

1995 年、ドイツ Suhrkamp 出版社より出版された十八人の作家の作品集『ベルリン物語集』と言う文庫本のアンソロジーが 1970 年代に当時の DDR で出版を企図されながら、それが抽出の中に死蔵され、二十年間出版されなかった状況に就いて、私は上述の 95 年版に添付された三人の編集者(当時の編集者でもあった。)のその間の事情を説明する前書きと出版を妨げた DDR 国家公安省 (Stasi) の記録文書やその他の記録文書を紹介解説しつつ論じてきた。¹⁾ しかし此のアンソロジーに収納された個々の作品に就いては論じなかった。

それらの作品には Stasi 自身も認めているように DDR 国家体制批判に全く繋がらない、つまり国家や政権党社会主義統一党の許容範囲にある作品もあれば、Stasi の記録文書も言及している出版禁止の原因の一つとなった作品もある。従って本稿ではそれら十八編の作品に言及し、場合によっては紹介解説し、論じ、問題になったと思われる作品に就いてはその点を論ずる事を目的とする。

(II)

此の作品集の最初の作品は Günter de Bruyn の『不法監禁』(Freiheitsberaubung)である。de Bruyn がその物語を「『実際に起こった楽しい或る物語』と評価し、彼は名前と住所のみを変えた。その物語では数年前に彼の住居の女性の隣人を巡って起こった一逸話が問題になろう。その間に此の女性は物語の中で言及されている人民警察官と結婚しており、また或る新しい住居を手に入れた。」と述べた事を Stasi の IM (非公式協力員) »Roman« は報告しており、更に「de Bruyn が元隣人の女性のお転婆ぶりに感激して物語を当時一氣に書

き上げた。それは既に四、五年前である。根本的には de Bruyn は此の物語を要するに何時か発表する考えはなかった。アンソロジーの為にそれは、ベルリンで 1945 年以降に事実起こった正に一つのベルリン物語であるが故にのみ提供された。」²⁾ と言う de Bruyn の言を伝えている。

この様な背景を持った此の物語は Stasi にとって好ましい物とならなかった。その理由はやはり 75 年 11 月 10 日付けの IM の名前も明示されていない国家公安省 (Stasi) 宛の文書に見られる。

その IM、いわゆる情報提供者によれば、『ベルリン物語集』と言うアンソロジーの下に集まった作家達は当時の DDR での出版に於いては恒例であった原稿審査係による原稿審査を検閲として締め出そうと意図しており、既に最初から此のアンソロジーは問題なのであり、その上「専門家達による原稿の最初の査定では DDR に於ける他の物と差異を付けない印刷はどんな場合でも不可能である。様々な寄稿の中に明らかに敵対的な、社会主義を中傷する叙述があるからだ。」とアンソロジーの内容に就いて彼は述べ、その基礎的理念は次の様に纏められると言う。「DDR の首都ベルリンは作家達の思いの中では個人的な運命、体験、経験及び失望の実り多き焦点として、同様に社会主義国家とその制度の為の試金石として物語的に描かれている。その際、一つの決定的に批判的な根本的主旨が支配的で、それは個々の寄稿では反社会主義的発言に迄至っている。」³⁾

彼は更に「原稿は個々の寄稿が偶然に編集されたのではないと言う事を示唆している。此の企画の或る構成上の相談と指導は疑いないだろう。明らかに組織者達は社会主義レアリズムの本来の本質への批判的な面を高め、或いは要するに社会主義の内部に『批判的レアリズム』を生み出す事に左右された。」⁴⁾ と述べ、専門家達の評価による個々の寄稿の否定的テーゼに言及する。その否定的テーゼが de Bruyn の上述の作品に見られると言う。

例えば DDR に於ける社会主義は特権によって特徴づけられている。一般の国民は成果に与らないか、或いは遙かに遅く与る。指導者達と役員達の不正がある。と言うテーゼを扱っている一つの作品が彼の『不法監禁』であり、Stasi

や国家に好ましくないと言うのである。そこで彼の作品を検討してみたい。

或るボーイの Ströhler がベルリンの仕事場から真夜中過ぎに、Linienstraße 263 番地の五階の住居に草臥れ些か酩酊し戻ると、その五分後に再びそこを出て、近くの Oranienburger Tor の電話ボックスから電話をしようとするが、その電話ボックスは毀れていて、結局、職場の居酒屋に戻り、地区の警察に電話をする。考えてみれば、70 年代に個人の住居に電話がなく公衆電話も毀れていると言う事態の描写が既に西側に知られたくない問題なのかも知れない。それはともかくとして、電話は警察官が直ちにパトカーを Linienstraße へ派遣して欲しいと言うものである。何故なら彼の住居と同じ奥の五階の隣家で一人の男が両拳でドアをどンドン叩き、彼の自由が奪われたと叫びながら主張し、緊急に国家権力を要請すると叫んでいるからである。国家権力の要請とは大げさで、実際にあった事件で男がそう表現したのか de Buruyn の創作による遊びか皮肉か判断し難いが、要するにその男は誰かによって閉じ込められたのでドアを開けての解放を望んでいるのである。Ströhler は警察官の問いに対し、彼は職業柄飲んではいるが酔ってはいないし、閉じ込められた男も声を聞き限り酔ってはいないと答え、その住居の表玄関のドアは閉じられてはいないと答え、彼は直ちにその住居の前に引き返し、パトカーを待ち受けると述べ、その古い住居全体の複雑さを説明する。更に彼は隣の住居の持ち主とは親しくはないが、その女性は二歳、四歳、六歳の三人の子供がいる Paschke と云う若い女性で、三人の子供に同時に託児所と幼稚園を提供して貰えないので、いまや Friedrichstraße の小ホテルのフロント係として夜の十時より早朝六時迄働いていると説明し、その女性は苦勞しており、入れ代わる男達を計算に入れなければ要するにまでも、ドアを叩いている男は Ströhler がここ数ヶ月壁を通してではなく、階段越しに既にしばしば聞いた声を聞き違えていなければ、その男達の一人であるとも述べる。上述の女性の状況に係わる叙述には見ようによっては社会主義の理想に相応しくない描写があるとも言える。それを作者が意識して描いたのか、ありのままに描いたのか私には判断出来ない。しかしそれに続く次の描写は興味深い。壁を通して聞こえないのは壁が厚くて音を遮断するからで、

それは此の家の唯一の長所であると Ströhler が強調する点である。そして彼は例の男の名を知らぬと主張する。

彼が住居の前に到達すると重量級の人民警察少尉は既に車より降りており、名のらず彼の説明を聞きながら彼と共に中庭を横切り、階段を上り子供達や入れ代わる男達に就いて質問し、彼は入れ代わる男達と子供達の父子関係に就いては敢えて否定する。彼は彼女をまともで、数ヶ月か数年で男達が消えるので気の毒な女性と表現したからである。此处で彼はその原因をその酷さに殆ど長い事耐えられない住居のせいにする。警察官は二つのドア越しに男から悪意で Paschke 夫人から閉じ込められたと言う主張を聞き、即座に解放を主張する男を静め、彼女の勤務先を Ströhler から聞き、お休みを言いその住居を後にする。

続いて此の物語の主人公 Anita Paschke の事が描写される。彼女は小さなホテルに居て、真夜中迄テレビを観て、編み物をする。目覚まし時計を起きる時間に設定しそれぞれの部屋の鍵を取れる様にし、安楽椅子で毛布にくるまり寝ようとするが、心配事で五分から十分目覚めている。心配事とは閉じ込められた男の事ではなく、彼によって解き放たれた事である。鼠の事であり、衛生設備と諸官庁の事である。翌日子供達を連れて祈願参りをし、涙を流し、絶望を爆発させようと思う。「彼女は叱り、罵り、鼠を巡る多くの物語の幾つかを語るであろう。寒さ、暑さ、湿気、汚れ、悪臭に就いて語るであろう。子供達の様々な病気を数え上げ、設計技師達や板金工達、配管工達の専門的な意見を利用し、望むらくは今一度、彼女の住居状況は住居としての要求に値しないと言う事を総合病院、衛生監督局、福祉事務局と青少年保護局が彼女に証明する官庁の書類の束を手に入れるであろう。その束を彼女は、此处でも三人の騒がしい子供達に伴われて住宅局へ持って行くであろう。そこではその束は不機嫌に彼女の既に立派な書類の山へ閉じられるであろう。」⁵⁾

此处で語られているのは DDR の首都ベルリンの酷い住宅状況であり、当局の官僚的対応である。続いて共同トイレが彼女の場合の様に階段の途中にあるのではなく、中庭にあり、水道管は氷点下では凍結し、修理されないより酷い

住宅状況の住居と、より哀れな人々の事が彼女の思考の形で語られる。一方彼女の場合よりも遙かにうまく行っている家族が語られ、住居が壊されるか、新築住居を供給する地位の一つに関係がない限り数年来住んでいるその様な汚れた穴から抜けられない人が居る不正も語られる。社会主義下のスローガンに相応しくないコネと不公平の原理である。

彼女が改めて眠ろうとした時、警察官が呼び鈴を押し、彼女の前では位と共に Schällicke と名乗りそこに来た理由を述べ、彼女が面白がっているのに驚く。階下に同僚達が待っているの、急いで片を付けようとするが、意志に反して非難も指導もせずに、彼女の話聞く。そこには彼女の魅惑に囚われた国家公務員の描写が伺われる。閉じ込められた男は友人達や女性達から Sigi と呼ばれている Siegfried Böttger で人民企業の所長で、そのポストの故に妻と二人の子供がいる Leipzig の住居を去り、ベルリンの Leipziger Straße の快適な新築住居がまだ完成していなかったので此のホテルに宿泊し、彼女は四ヶ月前に彼と知り合いとなった。家族との別離と新しい仕事が彼を疲弊させ、彼が彼女と子供達に親切にすると、多くの悪い経験にも係わらず彼女はいつもの様に彼を好きになる。しかし彼との場合はスムーズには行かなかった。彼が彼女の汚れた住居を彼の故郷の住居と同様素晴らしいと見なしたからである。彼女は彼をホテルへ送り返そうとしたが、三週間後、錆び付いた流しやひび割れた漆喰や水のしみ、詰まった給水管への彼の心酔は終わる。日曜日の朝、鼠が便器の中に居て、彼の食欲を殺いだからである。鼠は彼を見つめ、排水の中に飛び込み、泳ぎ、流しても再び浮かび上がり、便器によじ登る。此処で作者は幼少の頃から彼女に纏わる鼠の話に言及する。彼女はその人生の 32 年間その住居に住んでおり、常に住居に悩み、人生の目標はそこを去る事であった。人生で為し、考え、感じた事全てはそこに向けられた。恋ですらそこに向けられた。従って彼女は鼠騒動の朝、彼女にお前は此処を出なければならないと叫び、その為の力を持つこの同志所長の虜になった。

「何故なら彼は様々な係わりを持ち、その係わりは社会主義では金より重要な事は周知である。その分配に際しては、その規則を証明しなければならない諸

例外を除いて、厳しく規則的に行われる住居や自動車の様な大きな事態が問題になる場合には。そしてその諸例外に人は正に何らかの方法で属さなければならない、不当な悲惨から抜きたいならば。」⁶⁾ 此の箇所が正に Stasi が指摘する問題である事は論を待たない。少尉は任務上その様な発言に本来責任を負わないにもかかわらず、似たような境遇なので同意するが、「快適な住居を建築する権力の為に功績のある者は、普段、彼は常に言うのだが、遅かれ早かれまた快適な住居を手に入れる。」⁷⁾ と思うが口にせず、犯罪行為になり得る彼女の行為の原因を聞く。上述の思考の描写にも Stasi の不満がある事は想像に難くない。

犯罪行為と云う言葉から、彼女は実際に犯罪行為を行い、裁判官の前で彼女の実情を上申したい、そうすれば明るい住居に入れるであろうと云う新しく生まれた考えまで述べる。あれは純粋な行為で、彼女が追い詰められる時、その様な事を必要とすると彼女は述べ、彼女が閉じ込めた時、事態を真剣には考えていなかったが、彼が取っ手を揺さぶりながら、馬鹿な冗談は止せと言ったので彼女は鍵を抜き、立ち去ったのだ。その教育者の調子が四時間も彼女を激怒させたのだと語り、私は全てを良く知っていると言う支配者の調子、私は常に正しいと言う所長の調子、もう沢山だ、貴女には計り知れない寛容さで接してきたが、良い意図にも係わらず貴女は変わらなかった、私達の道は残念ながら別れざるを得ないが、貴女が私を手こずらさないだろうと望みたいと言う調子が激怒させたのだ。

少尉が、「監禁はそれでは不実への罰として考えられたのか？」と問うたのに、彼女は「いったい不実とは何を意味するのか？ 或る約束を守らなかった事が問題だったのだ。」⁸⁾ と述べ、結婚の事ではないと語る。幻想を捨てる事を決して学ばない彼女は「彼が彼女に調達しようと思った住居の事を三ヶ月もの間信じた。夜毎に彼はその事に就いて語った。それが彼女にはアルコールの様に作用した。余りにも固く彼女は彼の言を信じたので時々既に別離の感傷が彼女を襲ったのだ。既に彼女は、清潔で日当たりの良い住居に住んで十年後この汚い穴居を再見する時、感動の感情を持つゆとりがある事は何と素晴らしいに違いないと云う一つの観念を抱いたのだ。」⁹⁾ とも語る。

ところがこの様な突然の結末が来たのだ。彼女が正当に彼を愛していないと彼が四時間も説明し、彼女の住居の事は話題にならず、ただ序での様に彼の五部屋の高層住宅新居が話題になったのだ。それは即時入居可能で、たった今始まった日が転居の日で、彼は午前五時に妻を手伝う為に Leipzig に居ねばならず、昨夜 23 時に彼の車を手配したのだ。

彼女は Schällicke 氏に時間を聞き午前一時である事を確かめると、彼に住居と部屋の鍵を渡し、家に入るとき鼠を踏まぬ様に注意する。少尉は同僚と共に車で現場に戻り、悪態をつく所長を解放する。少尉は寝ている子供達を見守り、鍵を預かると言うパジャマ姿のボーイ Ströhler の申し出を規則に従って断る。

物語は此处で終わるが、貧しい住居の一般庶民とすぐ新居を手に入れる地位のある人物との対比的描写は間違いなく為政者や Stasi には立腹の原因であったのだ。この様な些細な批判的叙述が出版禁止の原因になる様な国家、政権には未来はなかったのであろう。

(III)

『ベルリン物語集』に収録されている第二作は Elke Erb の『ベルリン・ホーエンシェーンハウゼンに於ける住宅地の家』と言う作品で、実際にあったとは信じ難い或る女性よりの聞き書きによる物語である。嘗て共産党員としてベルリン市内にいて、その頃からとりわけその妻がユダヤ人救済に尽力し、SA (ナチスの突撃隊)に襲われた後にその郊外の住宅地に移住した夫妻が、息子をヒトラーユゲントに入れず、注意されていたにも係わらず、ユダヤ人の見捨てられた乳飲み子を 1943 年に引き取ったのを契機に、その若い両親、更にユダヤ人中年夫妻とその老母を屋根裏部屋や納屋に匿うのである。そののみか、密かに早朝または夜遅く訪ねてくる別のユダヤ人に食事を提供する。当時、食料品は配給券でしか手に入らなかったが、ユダヤ人達の或る親戚が仕入れ人で、ユダヤ人が持っていた高い金で肉を調達し、或る女性占い師がユダヤ人達に食料品配給券を買い入れてくれた。また例の賢明な妻は若夫婦と一緒に、彼等が園丁に残してきた物や衣服を取ってきて、ユダヤ人達は腹を空かせたり、凍えたり

しなかった。ユダヤ人中年夫妻等が来る前に近くの空き地には高射砲陣地が設営され、都市の外れの家々に兵士達が宿泊し、最初の宿泊は彼等の家で、兵士は屋根裏部屋に寝たが、ユダヤ人若夫婦と乳飲み子は隠れる事が出来た。子供が泣かなかったからである。中年夫妻が来た後に、士官達が宿泊の可能性を調査した時も彼等と賢明な例の妻は事態を切り抜けた。兵士が再び宿泊した時、二組の夫婦は隠れ、老母と子供は親戚と主張された。妻は時々ゲシュタポに呼び出されたし、些か余りにも率直にしてあからさまで、誰かが密告した可能性もあった。その事を暗示した葉書も受けたし、ゲシュタポの書類に「逮捕」と言うメモも読んだ。しかし或る役人が彼女を護ったと推測した。

1944年四月には老母の卒中発作を巡って彼女はナチスの医者まで呼ぶ手配をし、老母が死に、危険を免れたが、彼等は埋葬迄した。その墓発見の危険もあったが、彼等は五月に終戦を迎え、ユダヤ人達は十月迄留まり、死んだ老母は新しいユダヤ教信徒達により葬儀を受けた。最初に述べた様に信じがたい話であるが、事実なのであろう。そして此の物語は Stasi にとっても、政権党にとっても好ましい物であった事は想像に難くない。

第三作は Fritz Rudolf Fries の『私は一つの都市を克服したかった』(Ich wollte eine Stadt erobern)であり、五十年代末ベルリンへ来た地方出身の Arlecq を巡る起伏のない話である。ベルリンへ来た彼は「地方は此处には存在しなかった。あたかも都市が地平線のあらゆる方向の全ての意のままになる土地を覆っているかの様であった。」¹⁰⁾と云う感慨を抱き、此处では彼がなし得る事を示さねばならぬし、稼ぎ支出する生活をしようと思い、翻訳者を志望した。彼には此の都市のはずれに住んでいる恋人がいた。彼は都市の光景を描写し、例えば Friedrichstraße の報道機関用カフェで、都市のモルグで働き、死者達に就いて話をした痩せた男との対話や、(その際、彼は文学や絵画に於ける生死の世界の事を思い出し、都市の運河や川に落ちたかなりの人々が生死の境界を越えて行くと云う男の話から、他の全ての境界はこの年は融通性があったとその後のベルリンの壁を示唆する。)そのカフェに出入りする売春婦、覗き見嗜好者、M. Reinhardt の様な著名な演出家の話をする年を取った舞台女優達

や記者達に就いて、更にそのカフェーで臨時雇いのボーイの姿をしていた G. Benn との交流に就いて叙述する。また彼は戦後、様変わりした有名なホテル Adlon に住んだ話、H. Miller や T. S. Eliot の本を西側の貨幣で手に入れ、その本を抱えて Kurfürstendamm を歩く快い気持を述べる。彼は光明に満ちた近代的な世界的都市を地方から想像したが、ショウウィンドウを見ると復興の努力が見られ、二流のアメリカが見られると語る。続いて以下の様に描写される。彼は通りを歩く女性達に目を奪われる。「二十世紀のギャラリーの古い絵に従って化粧した一人の美人。都市はその失われた貌を再び得ようとした。二十年代の化粧をした貌を、三十年代が唾をした不機嫌な貌を、四十年代はそれを引き裂いた、都市がなおそのプロフィールのみを、それで未来が交換可能であった永遠の鑄造貨幣のみを示そうとしたのだ。Arlecq は彼が知っていた物を見つけた、しかし既知な物は生きており、走り回り、驚かした。それは書架へ戻されず、講義用のノートへ閉じ込められなかった。」¹¹⁾ 此処には二十年代の良き貌を取り戻したベルリンとそれを拒否した三十年代、四十年代のナチス時代への批判が見られる。

更に彼は此の都市に就いて語り、Lichtenberg に住む Joe S. の生活、恋人 Anne に就いて語る。彼女は仕事が終わると、夜バレーを習っており、彼女の両親が犠牲者となった階級闘争に就いてしたたかな物語を語っていた振り付けの着想の為に熱心に練習をした。Arlecq は発見をする為に一日中此の都市のあらゆる列車に乗る。その発見の対象に偶然なったのは地方で知っていた政府の客であったデンマークの共産党員 Ole Vilumsen で、Arlecq は嘗て、地方では敵意や教師の怒りや研究室からの追放を意味したであろう彼の連想の能力を羨む。レーニン主義とダリ、ゴリキーと実存主義、ブルトンと猿の人間への進化、スカラッティとジャズである。彼はそれを当然のように持ち出し、時代の高みに居ろと言う。一方時代の高みに居ろと云う此の西側の思考を Joe S. は笑い飛ばし、彼にとって東西の対照は第一に交通問題である様に思えたとし、第二に貨幣問題であり、第三に思考の問題には思えなかった。或る思考となると45年の崩壊と廃墟に迄至ったのであり、絶対的経験の何かを持った年齢制限の

様な数に迄至ったのである。此処に東西の共産党の思考の相違への批判が読み取れるかも知れない。

続けて Anne と Arlecq の愛が語られる。彼等は公園で覗き見されたり、『広島、吾が愛』と云う日仏合作映画を観たりした。彼女に妊娠を告げられ、彼の心情は変化し、乗っている電車の内部は借りた古い部屋の様に見えたのであり、そこでの二人の生活が描写される。彼には彼を誤って余りにも早く都市へ駆り立てたあの地方での生活が未だに一つの夢であった様に思えたのだが、Anne の状況がそれを否定し、彼は都市のはずれに移住し、彼女と子供と住み、「都市をそのはずれから観て、いまやそう云う全てを望んでいたかの様に思い、落ち着きの中で彼より観察される為に都市が構成されているのは彼の構想あったかの様に思った。そこで彼は木々の下に座り、都市の列車の音は風の状況如何によって伝わり、彼は子供を観察し季節の交代に没頭する。」¹²⁾

此の物語も Stasi にとって問題はなかったのである。

第四作目は Uwe Grüning の『十一月の大陸棚』（Novemberschelf）であり、やはりベルリンの日常を描いている。アレキサンダーブラッツと Döblin と Franz Biberkopf の話に始まり、都市の膨張、ポスト、地下鉄、十一月に雪崩れ込む十月の雨、思考の、そして未だ日曜と冬の準備をしていないベルリンの快適な黄昏、光と落ち葉の緩やかな上下運動、信号を待つ車や人々、その絶えざる動きと停止、危険な交通違反とブレーキの音、そして驚いて引き下がる人間達。更に手紙はベルリンへ到着するのより、ベルリンから配達される方が遅いと語り、「人は一度所有している物を力で引き留めるのか、それが同様に力で引き離される迄？ そしてシンドバットの磁石の山またはブラックホーンの如く、都市は近づく物全てを、魔力で引き付けるのか？」¹³⁾ と都市の特殊性に目をやり、街路名標識版に就いて DDR の作家らしく次の様に記す。「Erich Weinert と私は街路名標識版に読む、作家で反ファシストとある。何故、共産主義者で作家或いはその様な者と書いてないのか？ どうして街路名標識版はともかく全てを未知の人々にしてしまうのか、有名な人々や賞賛に値しない人々を。」¹⁴⁾ 都市の描写は更に続き、地下鉄が高架線になり、都市鉄道が橋の下を走るのに

目を見張る。新築住居地域(注、1950年1月1日以降建築)と旧地区住居地域(注、1949年12月31日以前建築)の相違が語られ、「あらゆる進歩は同時に何かが死滅するか、ただなお博物館と奇妙な祭典で生き延びる。差し当たってオープンな炉が廃れ、ストーブが廃れる。そして新築住居の子供達で嘗て火を見た者は個々の蠟燭かマッチか、両親がその煙草に火を付けるライターの火であろう。」¹⁵⁾と述べられ、火は最早我々の時代や日々のものではなく、やがて大きな坩堝や、車両のモーターや、ディーゼル機関車やタンカーの燃焼室の中で見えなくなる、と社会主義、資本主義に関係ない状況が書かれている。此の作品の語り手、私はベルリンでは多くの夢が見られるので物語にすべく夢の話を求め、或る知人の女性の夢を記す。彼女は十歳の少年が持ってきた爬虫類の真に迫った玩具に悩まされ夢を見る。夢で大きな気味の悪い蛇と斧で闘い、悪戦苦闘し、家具を壊し、蛇を葬り、トイレに流すが、咬まれたかどうか判らず多くの解毒剤を呑み、気分が悪くなり目覚め、トイレで吐くが中を見ない。蛇がいると思ったからである。彼女は続けてその前日にポニーに乗って友人と映画を見に行った奇妙な夢も語る。

続けて主人公の私は、これがベルリンであると述べ、「でも或る十一月のベルリンで、その背後に深みが始まる大陸棚の海である。それぞれが一つの別の貌を持つ都市から成り立っている此の都市。」¹⁶⁾と語り、Köpenick、Pankow、der Weiße Seeの特徴を記し、最後に「ベルリンーDDRの首都。あたかも此の形容辞が必要かの如く。ベルリンが一つの首都である事は地方に於いてすら、自由意志で除外された者達に於いてすら触れ回れる事がなかったの如く。」¹⁷⁾と云う言葉で終わる。興味深い物語であり、むしろDDRを賞賛していると云えよう。

第五作目の Gert Härtl の『ボウリングに就いて』(Vom Bowling)は最初より「Saquerieurは言った。」と云う形式で始まり、それで終わる物語であるが、語彙は簡単であるにも係わらず文章が複雑で私には判断し難く翻訳し難い、筋と言えるものはない。言語の役割、言語と文章、言語と身振り行動の関係を語り、思考と言語の自由にも話題が及ぶ。それらとの係わりでボウリングに就い

て述べられるが、全体的に当局の検閲を避けての表現とも思われ、誤訳の可能性もあり、此处では内容の紹介は避けざるを得ない。しかし此の作品はやはり、情報提供者によって批判の対象となり次の様に述べられている。

つまり、此の作品は、DDR に於ける社会主義の社会大系は個々人には見通し出来ない。個々人は疎外され、操作されている。テロルが存在しているが、疎外のプロセスの結果、それは客観的対象にはならず、具体的に把握されず指摘されない云々と語っており、此の作品は明らかに個人的な知性的傲慢と云う印象を与えると指摘される。¹⁸⁾

続く第六作は Heide Härtl の『訪問』(Besuch)であり、ベルリンへ来た主人公 Christian Gerber を巡る話である。病気でもはや働けないであろうと云う事が明らかになって以来、彼は此の旅行の準備をし、彼の母や姉妹のもとを長い間訪ねた後に、彼を子供の頃より甥や姪の中の年長者として、しかし援助を必要とする者として遇してきた子供のいない叔母を訪ねるべくベルリンへ来て、たとえ病気でもなし得る多くの素晴らしい事があると聞いていたので、それを探す。しかし、実在する様式や形体や色彩、資源やその組み合わせの多さに直面して、彼は民族芸術、手工業、大好きな仕事に向かう事が出来なかった。彼は生活必需品の選択にも迷うのである。続けて歌を歌う彼の趣味が語られ、病気を巡る状況と彼の心情が述べられる。彼は DDR 全体の至る所に一週間滞在し、三ヶ月掛ける旅行を企画したが、母の元に三週間、友人と姉妹の元にそれぞれ二週間、それ以外の予定も入り、計画したルートも廻れず、それを中止し、家で片付ける幾つかの事もあり、三ヶ月後に一度、家に戻ったのだ。彼は旅行とは名所旧跡、風景を訪ねるものと思っていたが、今や彼の旅行の目的はむしろ人々を訪ね、彼等の習慣を観察し、彼等の仕事や生活、建造物との共生の仕方を観察する事となった。それに関してはする事が沢山あったが、決して定義できる成果に至らず、やむを得ないと思った。彼はベルリンに何か特別な物を見る希望を持っていなかったがベルリンへ来て、叔母を訪ねようとした。彼女は彼が来る事を知っていたが、叔母を突然訪ねて驚かす訳にもいかず、叔母が事務所で仕事が終わるまでベルリンのアレキサンダープラッツ周辺を散

策し、色々と思案する。巨大なテレビ塔底部は彼を不安にし、彼はレッスン
を思い出し、一つの芸術作品は人間に美学的に作用するのに十分に小さいが、
テレビ塔底部ではそれは多分不可能だったと思う。此の DDR の象徴に対す
る描写に、作者の DDR 政権へのささやかな批判を読み取れない事もない。
彼は叔母に電話をする。彼は叔母と会う約束の時間迄、市役所の前を通り Hed-
wigs 大会堂を訪ねるが、市役所の所で「此処の何処に私の希望の場所があるの
か」¹⁹⁾と自問する。大会堂で彼はそこを訪ねてきた人々を観察する。そこから
叔母の住居を訪ねる途中、再び様々な建造物を観るが、何故、彼は単純に叔母
を訪ねる事が出来ないのか自問し、何故、彼が観る物を分析しなければならない
のか自問する。「しかしそれらは現象に過ぎず、本質は私に閉じられたままだ
と彼は考えた。私は建物の正面や通りや窓ガラスやカーテンを見るが、それが
何を意味するのかと自問し、考えた。」²⁰⁾此の文章を読む時、またこの様な社会
主義国の市民には相応しくないであろう無気力な思考が更に綴られているのを
読むと、社会主義下の生活批判とも取れる。彼は一軒の陶器の店でマイセンの
陶器の小さな花瓶を買い、叔母を訪ね、彼は体を洗い夕食を叔母と共にとる。

全体的に、これと云った内容のない物語であり、文章にも特徴はなく、上述
の様な作者の批判が読み取れない事もないが、Stasi の側からの批判はない。

(IV)

第七作は Stasi が一貫して此のアンソロジー『ベルリン物語集』編集の思想
的指導者と見なし、その自主的出版と検閲拒否、及び DDR 政権批判の作品
掲載をも目指した指導者と見なした S. Heym の作品『吾がリヒャルト』(Mein
Richard)である。(注: 拙稿『「ベルリン物語集」と国家公安省』の中では上述
のタイトルに訳したが、語り手が女性故『私のリヒャルト』が適切とも思われ
る。)

やがて取り壊される予定であり、今や他には誰も住んでいない東西ベルリン
の境界にある住居に、政権党ドイツ社会主義統一党 (SED) の役員故に住んで
いた二家族の偶然同名の息子二人のリヒャルトと母親を巡る物語である。語り

手であり、十五歳のリヒャルトの母であるツンク婦人が週に一度、青少年厚生施設にいる息子を訪ねるところから物語は始まる。古参党员であり、故古参党员の寡婦でもある彼女は息子を正しく育成しなかった責任を覚えるが、同時に息子の変化に戸惑いも感じていた。彼女は息子を鋭く観察しなかったし、彼が同じ住居の階下に住む十七歳であるが、小柄で彼より年少に見えるリヒャルト・エーデルワイスと余りにもしばしば外出し、遅く帰宅するのに注意しなかった。彼は自由ドイツ青年団(FDJ)の催し物に欠席し、学校の生物研究会やロシア語研究会にも出席せず、彼女は息子を信頼し、彼の反応を恐れ、確かめるのを怠った。そこから、或る日一人の若い男が彼女の職場を訪ね、貴女を不安にするつもりはないが、「貴女の息子は今日、学校より帰宅しないでしょう。」と言い、「リヒャルトは何処にいるのか?」の問いに「我々は彼を拘束しなければならなかった。」²¹⁾と述べた事に話は遡る。彼が幼少の頃大病を患った時と同様に不安になり、彼に何かが起こったのかとの問いに、その若い男は彼を教室から連行させた事、彼は誠実に従った事、彼の状況はそれ相応に良い事を述べ、彼女が前々日の19時から23時迄何処にいたのか、一度帰宅したのかと彼女のアリバイを尋ねた。彼女はその日は独ソ友好の集会に出席し、家に戻らず、十一時直後帰宅した時、彼が自室にいて、彼女は彼が何をしていたのか聞かなかった事を答え、不安に駆られ、彼が何か暴力事件を起こしたのか尋ねた。「その様な種類の悪事が問題ではない。」²²⁾と男は応じ、職場の党書記と職場長代理の立ち会いの下、彼女は購買部長の地位を臨時に解かれ、下に待たせてあった車で自宅に連れ戻された。彼女は階下のエーデルワイス婦人の不安げな顔を見た後、上階へ連れて行かれ、リヒャルトの部屋と彼女の部屋が制服の人々が主体で捜査された後、入念に現状に回復された印象を抱いた。一人の男がシャツを脱ぎ、リヒャルトの部屋の窓より這い出て、妻と別れたエーデルワイス氏の車の車庫に未だ使用されていたガレージの屋根に飛び降り、その縁に行き有刺鉄線の塀越しに西側地域に飛び降りるかの如き振る舞いをし、その各動作が同時に撮影された。此の状況は犬を連れた国境警察官とやや離れた西側の警察官と米兵に観察され、彼女は不安になり、私は私の息子を、私の息子を

見たい！ と叫び、静められた。彼女のリヒャルトが何を犯したのかには、調査が済み、誰がなお此の事件に絡み、何処まで進展したのか判るまで伝えられぬと一人の中年の男が応じ、東西ドイツ間に建造された反ファシストの壁は軽率に弄ぶ事柄ではないとリヒャルトの犯罪を暗示したが、言及し過ぎたと彼は思い彼女の息子には階下のリヒャルト以外にどのような友人が居たか等多くの質問を浴びせ、彼女は二度もトイレへ行き、二度目は吐いてしまう。彼女は額に汗をし、質問は打ち切られるが、彼等は去る前に、彼女はまた質問に答えられる様に準備をし、ポツダム地域を彼等に知らせずに去らぬ様に言い、何か起こった場合連絡する様にも言う。この辺の Heym の描写は当時の DDR では当然であったであろう個人の同意も得ず、捜査令状なしの家宅捜査を詳細に叙述していると言える。

続いて荒らされた庭や、やはりその息子リヒャルトを逮捕されたエーデルワイス婦人の困惑と、車で一人の男と来て離婚の際の彼女の親権を盾に、息子への彼女の責任を非難するエーデルワイス氏の姿勢を描写する。しかし彼は息子を見捨てるわけではないと、ツンク婦人の存在も意識して語り、同伴した友人の弁護士カーン博士に助けを求めたと述べる。後者は両婦人と握手をし、少年にありがちな冒険心に触れる。エーデルワイス氏がツンク婦人の息子リヒャルトが彼のリヒャルトに不幸な影響を与えたと述べた時、彼女は反論するが、カーン博士に彼女の息子の弁護を提案され、同意する。その後の数週間を彼女は不安の中で送り、助けになる家族も友人もない事を痛感する。担当者達によるその後の二度に亘る訪問と質問があった後、彼女はカーン博士とリヒャルトに面会するが、事件に関する質問は看守に禁止される。リヒャルトは多くの迷惑をかけているのは残念だと語り、多分愚かな事をし、間違えているが、楽しかったと言い、看守に再び事件に触れる事を禁止される。母の心遣いと子の思いが交差する場面である。やがて面会時間が終わり彼は去り、彼女は法廷のドアの右側に二人のリヒャルトに対する「再三に亘る旅券法違反刑事事件」の張り紙を見る。エーデルワイス婦人も来ているが、今や法的に責任のないエーデルワイス氏は、人民化学企業連合化粧品部門指導部会議出席の為、欠席する。

SED の役員で、人民企業の責任者でもある男の無責任を Heym が批判していると読めない訳でもない。

労働者国家の古参党员である彼女の息子の再三に亘る旅券法違反に職場の同志がどう反応するか不安を抱き、彼女は法廷にエーデルワイス婦人、カーン博士と共に入り、裁判が始まる。入廷した息子の顔は数週間の内に幼年期の表情の痕跡を失い、彼は社会主義建設に尽力した若い頃の彼の父親を思い起こさせる。検事が型どおりに社会主義建設に邁進する青年達、ベルリンの壁の役割に就いて述べ、告訴された二人との違いを強調する。続けて彼は二人が彼等の住居の背後の壁を十四度に亘って、策略で歩哨と防止装置を避けて越えた事実と言及し、「彼等はしかもその上、資本主義的西側報道機関に対し、彼等の行為を自慢するまでに至り、その結果、彼等は我々共和国の法律と装置を笑いものにし、帝国主義的プロパガンダの水車に水を注いだ...」²³⁾と述べる。その上検事は彼等が両親、教師、FDJ 役員達を欺き、当局に彼等によって利用された通路の存在を教える事を考えず、他の者が国境を非合法に越える危険性を拡大した事実を重く見た。ツUNK 婦人は息子が往復すれば二十八回も狙撃される危険を冒した事に愕然とする。陪席判事二人を連れた女性判事の前で、一人の証人は柔軟性のある若者の誰もがザイルを使って越境出来る事を指摘し、別の証人は同じ事を考える他の者との連携を懸念する。それに対しカーン博士はその証拠があるかと反論し、それは西ベルリンの新聞記事のせいであろうと述べ、以下の新聞記事が検事によって読まれる。「リヒャルト・E. 及びリヒャルト Z. の二人は SED 役員の息子達であり、西ベルリン国境近くの小都市 D に住んでいるが、壁を越えて西側を訪問するのを習慣にしていた。15 歳のリヒャルト Z. は彼等が壁を越えるのは容易い事だ述べ、17 歳のリヒャルト E. は彼等は最初、少し不安を抱いていたが、今は『塀を越えて隣の庭へ行く様な』ものであると付け加えた。西ベルリンの生活は彼等に気に入ると彼等は認めたが、西側に留まるつもりはない。彼等の両親は国境を越えての彼等の遠足に就いて何ら知らないと言者達は肩をすぼめて説明した。『両親はでも理解しないでしよう...』」²⁴⁾

Heym がこの様な記事を作品に挿入した事に幾つかの意味があろう。先ず西側の記事は東側が言う程悪質ではない事、二人の少年には遊び心以外の悪意がなく、むしろ国家に忠実な事、世代間の齟齬等である。ツンク婦人は息子との対話が不十分であった事、息子の変化に気がつかなかった事を悔やむ。次に息子の陳述が始まり、彼等は映画を観に行った事、最後の越境後何人かの西側警官に東側から来たのか問われ、肯定すると西側に留まりたいのか聞かれ、否定すると西側に来た理由を聞かれ、映画観賞に触れると彼等は笑い、その一人の紹介で映画観賞後、別の男の質問を受け、警戒し多くは語らなかった事を述べる。また東側の証明書で料金を支払わずに館主から毎回、特別に入館させてもらった事も語る。そして楽しかったかと検事に問われ、肯定した場合、否定した場合の結果を考慮し、彼は不信気になるが、最後に『『はい』と彼は非常に落ち着いて言った。『私達は壁を越え、向こうを見るのが楽しかったです。そうでした... 私は判りません... 他に...』』²⁵⁾

この様な答えは判事の認め難い回答であり、政権にとっても認め難い回答であり、Heym がこう語らせた事は Stasi にとって苦々しいものであったろう。判事によって有罪の判決が下され、少年二人は法廷から去り、判事は母親二人の所へ来て、彼女らの罪に就いても触れる。検事と弁護士カーン博士は握手をするが、突然笑ってカーン博士が荒い声で語った以下の言葉は此の作品全体の内容を示唆しており、作者の言わんとしている事が如実に表れていて、興味深く秀逸である。「同志検事、私が貴男であったなら、二人の若者に勲章を申請したよ。」検事の「何故？」の問いに、「今、法廷が認知した様に、彼等は次から次へと十四度も我々共和国への絶対的忠誠を証明したからさ。」²⁶⁾ これに関して多くを語る必要はないであろう。Stasi がその報告の中で DDR に対する批判的テーゼとして挙げている「——DDR の国家と国家機関は独善的で無情な狭さによって指導されているのであろう。一つの通過出来る国境が社会主義への本当のまたは強制された忠誠の試金石なのであろう。」²⁷⁾ と言う此の作品の内容は、まさに此の作品の本質的テーマであり、批判の対象にされるべきものではない。此の作品が当時既に当局によって Heym の作品集から削除された事に

既に問題があった。

此の作品に続く第八作はやはり Stasi より「——DDR には或る祭典継続の爲の一種の『展示の自由』のみがある。現実には抑圧的な了見の狭さ、専横、強制である。」と言う批判的テーゼを取り上げた作品とされ、そこでは「憎しみと攻撃的調子が支配的で、取り分け人民警察と故役員達に向けられている。」²⁸⁾と報告された Hans Ulrich Klingler の『月曜日にはハンマーがおりた』(Am Montag fiel der Hammer) である。

物語は短い。Mecklenburg より世界平和友好祭(注: 73 年と思われる。)へとベルリンに来た、元 FDJ ではないが若くはない FDJ 代表が誤解によって人民警察に逮捕され、取り調べ室にいる。両足をアレキサンダーブラッツの噴水に冷やすため浸けたかららしい。彼は足を水で冷やす習慣をその前の週に青年達と毎日続けていた。「祖母が言う様に或る日は別の日と同じではないが法則や規定や政令は月曜が金曜と同じでなければならない。両足を噴水に入れるのが木曜日に許されているなら火曜日に禁止される事はない。我々の国家では諸法則はあわてて作られない。そこで国民は知らされ、問われ、審議され、そこで初めて決定されるか否定される。」²⁹⁾と彼は考える。それ故、警察官は彼を厳しく見る必要はないし、あたかも彼が犯罪者であるかの様な顔をする必要もないと彼は思う。また彼は全ての警察官が今日月曜日その様な顔をしていると思う。彼は平和友好祭で初めてベルリンへ来たが、警察官は彼等の村の場合と全く違い非常に親切だと思った。しかも彼は国家の敵でもなく、友好祭代表であるのに逮捕されたのである。彼は此处で国家元首 Walter Ulbricht が友好祭の真っ直中に亡くなった事を思い出し、死が隠され、祭典が中断されると思ったが、その様な事もなく、青年の友は死しても青年の友に留まっているとすぐに考えた。国家元首は、今日、私は死ぬので、明日より一週、国を挙げて服喪せよと言えたのに、そうはせず、「彼の最期の言葉で彼は我々の事を思い出し、死の床で我々に呼び掛けた: 友達よ祭典を祝え、万歳と叫べ、高々と、たとえ死の霧が私の眼を曇らせようとも。」と彼は述べているが、これは作者の創作か事実なのか私、筆者は知らない。実は当時私はドイツの西ベルリンに居て此の友好祭

に通訳として参加したのを覚えているが、Ulbricht の死が報じられたが、国を挙げての喪に服する感がなかったのを思い出す。更に彼は語る。「死に就いてまで真にインタナショナルで、我々はそれを彼に感謝する術を心得ていた。火花が上げられ、それは Mecklenburg でも轟いた。そしてウンターデンリンデンでは早朝まで踊られた。人は我々が或る階級の敵の死を祝っていると信ずる事が出来ただろう。」³⁰⁾ と。此の箇所がまさに「故役員達云々」と云う Stasi の批判に当たるのであろう。

友好祭はそうであったと、彼は今日月曜日はもはや友好祭が終わっていた事を示唆する。続けて彼は嘗ての社会民主主義との政権党の論争とその打倒を思い出し、それには彼は参加しなかったが、他の手段で彼は前線で戦ったのを思い出す。彼は友好祭最中 Mecklenburg の代表で、十人の青年グループを指示していた。そして先週は認められた同じ行為をして今日は逮捕され、犯罪者の様に見られている。友好祭が終わった月曜である事を彼は忘れていたと彼は述べる。此の友好祭期間中とその後の警察の態度の相違描写が Stasi による此の作品否定の根拠なのである。

(V)

第九作として収録されているのは、Paul Gratzig の『ベルリンの輸送業パウレ』(Transportpaule in Berlin) であり、主人公パウレとその恋人ローゼを巡る一日の正にベルリン物語である。彼は家具職人百三十人の小さな人民企業の輸送担当者と思われ、戦闘隊 Friedrichshain に属する戦闘的共産主義者であり、彼女は国家経済企画委員会書記で二人は大学入学資格を得る為の夜間高等学校上級課程で机を並べて恋人同士になり、彼女の故に彼は嘗て Bornholmer Straße より M へ移住したのである。彼等は市電に乗り、この日 Schönhauser Allee を通り Bornholmer Straße にやって来た。彼はローゼと彼の旧居の前に立ち、何も変わっていないのを見るが、一部は改修されているのを知る。此処はおおよそ貧者が住む地域との彼の思いがある。M とベルリンの比較に就いて彼は次の様に思う。「私は M がベルリンよりいくらか好きだが、此の都市は余り

に自己の内側にあり、なお成長するには閉鎖的であった。私はチャンスを計算しなかった。ベルリンは違っていたが、そこに私は留まろうと思わなかった。此の都市は私には余りに大きく、多くが組織されていなかった。これらの石の山は私を抑圧したのみならず、これは他の所にもあったが、そこには人に言う事も許されず、多くの人間達の間で死ぬ事もあり得た週末があった。』³¹⁾ 大都会の人間疎外である。

旧居の前に立った彼は過去を思い出す。戦闘隊での勤務、西側の地下鉄の駅 Gesund-Brunnen で戦闘隊の制服でドイツ社会主義統一党 (SED) 機関誌 Neues Deutschland を読んでいて、隣の帽子を被った女性に示威的に席を立たれた経験、夜間学校が始まる三十分前の十七時半に戦闘隊を離れ、急いで戦闘服のまま教室へ駆けつけ、教室へ入り、彼の前に来たボール博士に「私は軍国主義者の前では講義をしない。決して！ 私は戦争を憎む！」³²⁾ と言われ、職場に引き返し着替えて再び授業に出席し、博士を喜ばした話等である。その後の此の東側から招かれた音楽好きの数学の西側教師ボール博士との友情に似た交流も思い出の形で語られる。彼は自称民主主義者であるが、東側の共産主義者に好意を寄せ、パウレを自宅に招き、ピアノを弾き、将来書き上げる数学の教科書を彼等に送ろうと意図した。それ以来パウレはベルリンへ来るたびにボール博士を眼で捜したが、ある日戦闘隊に勤務する彼の姿を集まった人々の間からボール博士が見て涙を流し、その理想主義が崩壊したかの感を示したのに気づいた。

此の辺りの描写は Stasi の批判の対象になり得たであろうが、此の作品への彼等の批判はない。この思い出から叙述は現在に戻り、その後の物語の展開は以下の如くである。

ローゼは彼を Schönhauser Allee へ引き戻し、突然ベルリンの夜の生活を知りたいと言った。彼等は U. Plenzdorf 脚本の映画『パウルとパウラ』(Paul und Paula)³³⁾ が上映されている映画館の前に来てローゼが「私達はパウルとパウラよ」と言い、それに対しパウレは「ベルリンには夜の生活はない、ベルリン人は働き、食べ、眠り、彼等の地所へ行き、そして結局死ぬのだ。未だ死んでいない人達は死者慰霊日に彼等の死者達を訪ねるのだ(中略)。私達の都市 M

にむしろ夜の生活がある。』³⁴⁾ と大都会の閉鎖状況に触れるが、一人の男に芸術家達の出入りする『鷗』(die Möwe) または『ヨハニスホーフ』(Johannishof) へ行く様に示唆され、前者へタクシーで行き、クラブ会員でない故、一度入場を拒否されるが、或る奇妙な Mülle と云う男の仲介で入り込む事に成功する。その豪華なクラブで二人は高級で美味な料理を飲食し、楽団による音楽を聴き、踊り、満喫するが、三人の俳優達を眼にし、彼等を凝視して、一人に嫌みを言われて彼は反発して舌を出し、ボーイより彼等の席は閉められると言われ、酔っぱらったローゼを抱き上げ、そこを出る羽目になる。彼は彼等とやたらと金を彼に請求し、金も出さずに飲み食いする Mülle の為に休暇旅行用に用意していた全財産を散財した。此のクラブの描写は詳細に興味深く、Mülle なる他人の懐をあてにする人物の描写も同様である。結局彼は現金を使い果たし、タクシーで彼女を送り届けるが、小切手での支払いを拒否した運転手にはローゼの父より金を借りる事になる。彼は彼女をベットまで運び、靴を脱がせて毛布を掛ける。彼女の父ウィリー (Willy) は何が起こったか知りたがり、彼は彼女がベルリンの夜の生活でほろ酔い気分になったと答え、彼女の母か姉妹と思われる Hedwig は酔っぱらった彼女に驚く。

作家は社会主義国にも特権階級の為の、庶民には遠い高級クラブがある事を示唆していると思われるが此処にも Stasi の批判はない。

第十作目を書いているのは西へ移住する以前の Güter Kunert であり、タイトルは『晶洞』(Die Druse) で、ベルリンと云う大都市描写であり、登場人物のいる物語ではない。彼は運河の上に立つオランダの居心地の良い建物やブダペストのユーゲントシュティールの家々やダウタウン・マンハッタンに於ける絵のような三階建ての建物の特徴を述べ、それに比較して彼等の都市ベルリンは灰色でみすぼらしく、「此の都市に就いておそらく歌は歌えるが、賛歌は歌えず、此の都市に就いてその外面的な現れ方はその特有な現れ方ではないと我々がともかく何となく感ずる。」と述べ、「石の建物に相応して、鉱物学上の或る比較をこの都市は晶洞の鉱物学の様に特徴付けられよう。外側は単調で目立たず形成され、内側は意外で驚くほど一種の結晶化なのである。』³⁵⁾ と先ず語

る。そして Werner Hegemann が名付けた嘗ての最大の殺風景な世界の団地アパート、此の石造りのベルリンは中心部を空爆で破壊されたにも係わらず、その石造りがなお相変わらず存在していると記し、更にベルリンには常になお以下の Walter Benjamin の言葉、「団地アパートは住むのにどれ程恐ろしくても、何処にも見られぬ程、それらの窓に悩みや犯罪のみならず、朝日と夕日が或る悲しげな大きさに反映した通りを造り出し、階段の吹き抜けとアスファルトから都市住民の幼年時代は、家畜小屋と田畑から農民の子がずっと前から失われる事のない本質を引き出した様に、本質を引き出した。」³⁶⁾ が当て嵌まると書く。

此处で語っているのは平民のベルリンの地域であると Kunert は言い、その様な本質は動かぬ水の如く、水面を支配するのと同じ光に丸形窓ガラスを通して浸透された建物の上がり口から屋根裏部屋までにあると述べ、階段の吹き抜けの孤独を強める街路の騒音が入らぬ分厚い窓や、六十年七十年の時の流れの中で染みついたキャベツや石炭の臭いに就いて語る。彼は更に大きなタイル張りの暖炉のある部屋や暗い部屋の特徴、よそ者にとっては幽霊の出る様なそれらの部屋を新聞広告により古い子供の玩具を求めて訪ねるよそ者に就いて述べる。また二人の子供達の様に長いこと一緒に住み、一方に死なれた老婦人達の話や、六十四年間も確固として一家族が住んでいた住居に失われた時代が再び見出される事も語られる。何故ならベルリン人達は定住する民族で、移住するのを嫌い、他の大都会とは対照的に彼等の家や通りや隣人や様々な店に結びつき、そこから離れたくないのだと作者は述べる。Kunert はまたベルリンの特徴を、Tucholsky がまだ知っていた地区によって異なるジャルゴンをはもはやなく、その住居地区から一度も出なかったベルリン人達の数も少なくなったが、それでもせいぜい周辺ではない地域から相変わらず都心へ出かける事に、そして年に三四度しか都心へ行かない人々が住んでいる事に見る。彼は更に密かに存続した Käthe Kollwitz のアトリエの住居やその裏窓から見えるベルリン最古のユダヤ人墓地、何処に埋葬されるかも知らず、ナチスによる最終的解決策初期に死に、そこに葬られているかも知れぬ彼の祖母に就いて叙述する。

彼によれば都市の更新に促進されて、その特有な本質、その取り違えような特性はその住民達の中に隠遁し、その具象性を失うのであり、その様な住民は平凡な顔をした知人のように見え、家々の中庭にも、Münzstraße の狭い昼間の場末の映画館に見られるのである。それらの映画館は嘗ての輝かしい平凡さ、犯罪の潜伏する過去の影として数年前、最終的致命傷を受ける迄、露命をつないできた Kunert は語る。またその様な人相は Charlottenstraße 49 の Luther & Wegner の地階レストランにも見られると彼は具体的に述べ、そのレストランと E.T.A. Hoffmann や Devrient の幽霊の係わりに触れる。また彼はそれらの人相とブランデンブルグ門の空洞の古代建築様式アーキトレヴでも出会うと語り、1893 年の『学校と家庭の為の郷土誌』（Eine Heimatkunde für Schule und Haus）の記事を引用し、ナポレオンによる門上の四頭立ての馬車に乗った勝利の女神略奪にも係わるこの門の歴史に触れる。また門上にあったと言われたスパルタクスト達やノスケの兵士達やカップ反乱者達、更に国防軍や赤軍兵士達の銘文が消されている事実にも言及し、門上から眺める西側の戦勝記念塔や東側の赤い市役所に触れる。

ベルリン人達の本質は Oranienburg、Auguststraße のカーテン屋のカーテンを脚立の上で張る女性にも見られると具体的に Kunert は述べ、平民のベルリンはシュレーバー菜園や小菜園地域にまで広がると語り、そこで巡り会う生活を詳細に興味深く彼独特の手法で描写する。また更に郊外の Biesdorf、Heinersdorf、Mahlsdorf 等の住居に残る宝物と言える雑貨、例えば 1896 年の Trep-tow で開かれたベルリン産業博覧会に於ける特有なアコーデオンの説明書とか煙草ケースの中にある動物達や人間達の形をした砂糖衣の人形からなるパラダイスに就いても語り、それらの雑貨は或る意味では寄せ集めた物や何かを長年に亘って付け加えて来た雑貨のあずまやと同じで、我々は Georg Grosz より Heinrich Zille のスケッチを思い浮かべると述べる。

彼はベルリンと云う分断された都市のパノラマが我々の前にあると述べ、自己の罪により分断され、「此の都市はローマではなく、その背景は帝国ではなく、その没落は数世紀に亘る文化と文明没落ではない——どんなに努力しても

類似していない。我々の都市は歴史の中心点でのかなり長い輝かしい存在の後、初めて徐々にその意義を失った他の首都の様に、その約束とその要求をただ完全に満たす事が出来なかった。この挫折と欲求不満が正に平民のベルリンの社会的伝記によって暗くされ、その住民達の精神により受け入れられ、正当な識別力なしに、重要な並びに重要でない事物を拾い上げ、維持し、大切に、手入れする傾向に(取り分け)示されている。或る軽い病的な収集癖であり、極端な場合無価値な物への偏愛であり、社会学的にはともかく束縛されていない。³⁷⁾ と Kunert は痛烈にベルリンの特徴を抉り出す。その様な例として Kunert はベルリンの階段の吹き抜けがある住居に於ける具体的例を挙げる。

このベルリン論とも言える作品の最後で、Kunert は W. Benjamin が或る優れたベルリンに関する本の評論で「失われる事のない本質」として特徴づけるのは「本来、失われた物に対する、戦争がなくても大都会が絶えず被る全くもはや数え上げられない損失に対する意義である。」と述べ、「それ故に我々は失われた物の対象の中に自らを保証しようとし、我々は今一度失われた物を手に入れようとする。」³⁸⁾ と語る。そしてそれ以外に平民のベルリンで何が発見出来るのか? と自問し、改めて W. Benjamin の「そしてベルリン人が先ずその都市でネオンサインの約束事以外の約束事を探せば、それはベルリン人の心に成長するであろう。」と云う言葉を引用し、「それは今日も有効であり、今日初めて正当なのだ」と述べ、「それは真実と云う約束事であり、それ以上でもそれ以下でもない。探せよ、そうすれば見出すであろう。」³⁹⁾ と此の興味深く、示唆に満ちたベルリン論を Kunert は閉じる。此のベルリン論に対する Stasi の論評はない。